



監督=羽住英一郎／原作=佐藤秀峰／出演=伊藤英明／加藤あい／海東健／伊藤淳史／藤竜也／香里菜（東宝配給／2003年日本映画／120分）

人命救助活動を任務とする海上保安庁の「潜水士」を目指す14名の訓練生たちの男同士の葛藤と友情を、ちょっとした恋愛話を交えながら描く、感動作。この映画のキーワードは、常に2人1組で任務を行うため、そのパートナーのことを呼ぶ「バディ」という言葉。「バディ」は恋人以上の固い絆で結ばれるもの……？　しかし、彼らを「海猿」と呼ぶのは、ちょっと失礼では……？

海上保安庁と海上自衛隊

海上保安庁は1948（昭和23）年5月1日の「海上保安庁法」の施行によって発足した組織で、「海上において、人命及び財産を保護し、並びに法律の違反を予防し、捜査し、及び鎮圧するため、国家行政組織法第3条第2項の規定に基づいて、国土交通大臣の管理する外局として」設置されるもの（同法1条1項）。

そしてその第2条によれば、海上保安庁の任務は「海上保安庁は、法令の海上における勵行、海難救助、海洋の汚染の防止、海上における犯罪の予防及び鎮圧、海上における犯人の捜査及び逮捕、海上における船舶交通に関する規制、水路、航路標識に関する事務その他海上の安全の確保に関する事務並びにこれらに附帯する事項に関する事務を行うことにより、海上の安全及び治安の確保を図ることを任務とする」と規定されている。

このように海上保安庁は、防衛庁長官ではなく、国土交通大臣の所轄におかれている。

これに対し海上自衛隊は、海上保安庁とはその目的も任務も全く異なるもの。すなわち海上自衛隊は、1954（昭和29）年7月1日に施行された自衛隊法に基づく組織。

そして自衛隊の任務は、自衛隊法第3条において「自衛隊は、わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、直接侵略及び間接侵略に対しわが国を防衛することを主たる任務とし、必要に応じ、公共の秩序の維持に当るものとする」と規定されており、前述の海上保安庁の任務とは明らかに異なるものだ。

海上保安大学と潜水士

海上保安庁は、同法第12条に基づいて、現在全国および沿岸水域を11の海上保安管区に分けています。また海上保安大学校は「海上保安大学校の名称、位置及び内部組織に関する府令」に基づいて設置されるもの。

また海上保安大学校・海上保安学校の卒業生は、本人の希望と適性によって、一定期間の研修後、パイロット、航空整備士、特殊救助隊など、さまざまな職種を目指すことができる。潜水士もその1つだ。

潜水士は、全国11管区から毎年2回、選ばれた14名が50日にわたる厳しい訓練を経て、それを卒業できた者だけに与えられる資格。

また特殊救助隊の任務は、危険物積載船の海難救助、転覆・火災・沈没船内からの人命救助及びヘリコプターからの特殊救難隊員が降下して行う救助などの特殊救難救助だ。

この映画のキーワードは「バディ」

この映画のキーワードは「バディ」。といってもこれは、俗によく言われる「ナイスバディ」というような、エッチな（？）意味ではない。水中での人命救助を任務とする潜水士は、常に危険と隣り合わせの任務に従事するため、その任務は常に2人1組で行うのが原則。そのため、そのパートナーのことを呼ぶ言葉が「バディ」だ。潜水士にとって、バディとは恋人や妻以上に大切（？）な男同志の絆で固く結ばれたパートナーなのだ。

この映画は、「海猿」と呼ばれながら、超エリートである、華の「潜水士」を

目指す14人の訓練士たちが、「バディ」をテーマとしてくり広げる男同士の葛藤と友情の物語。

映像 近時注目される海上保安庁の活躍 その1

近時、海上保安庁の活躍（？）が注目されたのは、2002年12月に鹿児島県奄美大島沖の東シナ海で起きた北朝鮮の武装工作船事件。この工作船を追跡したのが、第10海上保安管区の巡視船だ。

武装工作船はこの巡視船の追跡を逃げ切れず、銃撃戦となり、ついに沈没した。その後の調査によって、この沈没は「自爆」によるものであることが明らかになったうえ、この工作船は1998年に東シナ海で日本の暴力団組員らと覚せい剤の海上取引をした北朝鮮船籍の船で、日本漁船を装った「第12松神丸」と同一とみられることが明らかとなった。

その後海上保安庁はこの工作船を海底から引き上げて、これを鹿児島から東京に運び、お台場の「船の科学館」に格納し、2003年6月、一般公開する処置をとった。また海上保安庁は2003年3月、工作船の乗組員10名を殺人未遂容疑などで容疑者死亡のまま鹿児島地検に書類送検し、押収した工作船や武器類は同地検の管理下に移された。

映像 近時注目される海上保安庁の活躍 その2

また2004年3月に発生した尖閣諸島への中国人活動家による「不法上陸事件」でも、海上保安庁は活躍（？）した。すなわち3月23日、中国船が浙江省楽清市を出航したとの情報を受けて、これを追跡したのは、第11管区海上保安区の巡視船「はてるま」。海上保安庁には「対策室」が、第11管区には「対策本部」がそれぞれ設置されて、その対策が協議された。「はてるま」は中国船に接触し、退去警告を行ったが、7人の中国人を逮捕したのは沖縄県警の権限によるもの。「はてるま」は、逮捕された7人の中国人を収容し、これを那覇新港まで搬送する任務を完了した。

その司法的処理については、日本の国内法で処罰すると表明されていた。しかし警察当局は送検の手続を取らず、出入国管理・難民認定法第65条が、「同法違

反以外の疑いがない時に限って直ちに入管に引き渡すことができる」としている「刑事訴訟法の特例」を適用して入管に引き渡したうえ、入管が7名を中国へ強制退去処分にした。このような中途半端な結果に終わったことは記憶に新しいところだが、日本国内でこのような問題点が十分議論されていないことは大問題だと私は思っている。

恋愛模様もチラホラ

いくら男だけ14人の50日にわたる厳しい訓練と言っても、やはりここは日本。『シュリ』(99年)に描かれた北朝鮮の特殊任務を背負った「工作員」とは違い、そこには一定の「自由時間」があり、「解放された自由」がある。そんな貴重な自由時間を若い訓練生たちはどのように過ごすのだろうか……それは、当然誰もが予想するオンナ……というとちょっと品がないので、「彼女を探すこと」と言っておこう。

毎年潜水士の訓練が行われるのは、広島県の呉市にある海上保安大学校。訓練生たちは「海猿」と呼ばれ、地元の女の子たちからは敬遠されていたが、それでも若い男女の間に必然的に生まれるのが恋愛模様。

潜水のマスターライセンスをもつ優秀な訓練生である主人公、仙崎大輔（伊藤英明）は、ファッション雑誌の編集部員として張り切っている井沢環菜（加藤あい）と出会い、ぐでんぐでんに酔っぱらった環菜と、そのままラブホテルへ。そして……？

他方、仙崎のバディとなった工藤始（伊藤淳史）は、訓練での厳しいノルマを達成できず、いつも仙崎のお荷物的存在。しかし、故郷で漁師をしている父親たちが海で死ぬことのないように潜水士を目指しているという工藤は、純粋でいい奴。そんな工藤が一目惚れしたのは、看護婦の松原エリカ（香里奈）。この恋愛模様も一見順調そうだったが……？

男同士の葛藤

14人の中でもマスターライセンスを持っているのは、仙崎の他は三島優二（海東健）だけ。仙崎は海が好きだから潜水士を目指したという「自然児」であるの

に対し、三島はいわば「冷めたエリート」とでも言うべき存在だ。従って鬼教官の源太郎（藤竜也）が課する「バディと二人、海底に取り残された。水深40m、残圧30、片道一人分のエア……。オマエ達ならどうする？」という宿題に対しても、三島は「体力の残っている方が生き残る。場合によればバディを見捨てる」という明確な解答。

これに対し仙崎は、明確な解答を発見できないまま。そんなある日、工藤が彼女といい雰囲気になりかかった時、おぼれている子供を発見した工藤は敢然と海の中へ……。そして……。こんな不慮の事故によって仙崎はバディの工藤を失ってしまうことに……。

訓練期間の50日は日一日と過ぎて行き、明日は最終の海上訓練。そんな時を迎えて、源教官が新たに仙崎のバディとして指名したのは……？

映画ミエミエのストーリーでも……

いよいよ最終の海上訓練。「なぜ俺のバディが仙崎なのか？」と抗議する三島に対する源教官の答えは、「それは俺が決めたものだから」というもの。本来なら、これは答えにならない答えだが、そこは教官 VS. 訓練生という立場の違いがあるため、それ以上の文句は言えないまま……。そして当日、訓練は順調に進んでいた……。しかし、自然の海は恐ろしいモノ。そこで突然、潮の流れが変わったことによって、仙崎と三島のチームは……？

さあ、ここからがこの映画のハイライトだ。源教官の前述の問い合わせに対して仙崎が海の底で見つけた解答は……？　さあ、じっくりと映画を観て欲しいものだ。

映画査問委員会の行方と2人の恋の行方は？

海上訓練での突発的な事故はなんとか無事に解決。しかし、そこでの責任は源教官が負うことになるのは当然。そして開催された査問委員会の行方は……？　それも映画を観てのお楽しみに……。

さらに、仙崎と環菜の恋の行方は？　仙崎は海の男、潜水士としては申し分ない男だが、女の子に対する接し方はやっぱりちょっとイヤらしい……？

ぐでんぐでんに酔っぱらって完全に意識のない状態の環菜とのラブホテルでの

「出来事（？）」を、やっと正直に環菜に話したのは、仙崎が潜水士の訓練を完了してから。

つまり、仙崎は、傷心のまま呉市から東京に戻り何とか生活を立て直そうと必死に生活していた環菜の下を訪れ、わざわざこのことを伝えるわけだ。するとさて、この2人の恋の行方は……？

原作は佐藤秀峰氏のコミック

この映画の原作は1989年12月から2001年6月まで『週刊ヤングサンデー』（小学館）に連載された『海猿』。

単行本は小学館のヤングサンデーコミックス全12巻として発売され、若い海上保安官の間ではバイブル的な存在となっているそうだ。

コミック誌について言えば、私も昔は白土三平原作の『カムイ伝』を読みふけった記憶があるし、数年前はかわぐちかいじ原作の『沈黙の艦隊』の面白さに夢中になったものだ。そして最近は江川達也原作の『日露戦争物語』（現時点で11巻が既刊）。私の大好きな司馬遼太郎の『坂の上の雲』が描く世界と共通するものがあり、若い人たちに是非読んでもらいたいと思って私が最近すすめているコミック誌。

その歴史認識や主義、主張には大いに共鳴するところがあり、決して「たかがコミック」と侮ることはできないと痛感している次第。

したがって、この佐藤秀峰原作のコミック『海猿』が海上保安庁の全面的な協力を得て、このように立派に映画化されたことは、海上保安庁の役割が増大し、さらには自衛隊の海外派遣や憲法改正問題が真剣に論議されている今、きわめて意義のあることだと考えている。是非、原作とともにこの映画を鑑賞し、その意義を味わってもらいたいのだ。

2004(平成16)年5月19日記